

SN時空においてカルデ アが稼働する話

とれんた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルデア前所長であるマリスビリー・アニムスニアがSN界においてとあるものを見
つけてしまつたがゆえにすべてが動き出した。そんな話。

プロローグ1

目

次

1

プロローグ1

『根源』への道が開かれた冬木市聖杯戦争から十ヶ月。私はロンドンのLHRから日本へ東京行の飛行機の中で、個人的にハートレス博士に頼んでいた今回の聖杯戦争の報告書を手に取っていた。何度も読み返した報告書は所々傷んでいたり、手汗によりふやけてしまっていたりした。彼の報告書から読み取ることは大きく分けて三つだ。一つは聖杯戦争後の『始まりの御三家』と呼ばれるAINツベルン、遠坂、間桐の魔術師の家系の行動。一つはハートレス博士が自ら冬木市で聖杯戦争時に町の様子がどうのようかだつたか聞いたことと時計塔経由から送られてきた『遠坂凜』の報告書を比較し、『遠坂凜』の報告書が正しいかどうかの考察。一つはAINツベルンが用意した『小聖杯』か『大聖杯』のどちらか、あるいはその両方が回収が可能かどうかに関して。その三つの中でも私は最も重要視していたのは三つ目のAINツベルンが用意した『小聖杯』か『大聖杯』のどちらか、あるいはその両方の回収できる可能性についてだつた。そのどちらかを回収することによつて、少しでもカルデア稼働における予算を獲得することができればと言う思惑があつたからだ。私にはあと10年しか動くことが許されない。だから、それまでに何とかあれの起動をさせたいという焦燥感を感じていた。

ハートレス博士の報告書を読んでいくと、彼の独特な表現に読解するのに少し苦労したなと少し徒労感を思い出した。何度も読んだ上で、私が最も関心を寄せている『小聖杯』と『大聖杯』に関することに関して書いてある部分を何度も読んだ。博士の結論では、冬木市における柳洞寺の近くの鍾乳洞があつた場所を掘ることによって、『小聖杯』と『大聖杯』のどちらも手に入れる可能性がすこしは存在するというものだ。そのことを今回も確認することができたことに安心し、そして、今回の冬木市への調査が何か金になるものが見つかることを神にも祈るかのような気分になっていた。

まつたくもつて我ながら度し難いと思う。神への冒涜をしているかのような魔術師の自分がいくら余命が短いからと言つて、神に何かものを頼むような心象になつていることに対するして。

「マリスビリー様、朝食は和食と洋食どうなされますか？」

と、CAに声を掛けられたことで自分が物思いに没頭していたことに気付いた。

かなり化粧の濃いCAに対して、私は洋食でと軽く答えた。CAは了解の意を表す言葉を簡単に述べると、飛行機の前方へと向かつた。

あと数時間で日本につく。